

ニューロダイバーシティパラダイムにおける 支援のあり方に関する検討

—世田谷区受託事業「みつけばハウス」の取り組み—

綿貫 愛子 NPO 法人東京都自閉症協会

要 旨：近年、ニューロダイバーシティ(ND)パラダイムのなかで、自閉スペクトラム症(ASD)を多角的に検討し、捉えなおそうとする研究動向が生じている。ND パラダイムは、ASD のある人々の人生経験の本質を理解し、彼らにとって何が有意義な人生を構成するかについての議論を進める。世田谷区受託事業「みつけばハウス」では、発達凸凹特性のある若者が、多彩なワークショップの経験を通じて、生きるヒントになる「ナニカ」を見つける場所である。利用者を対象にアンケート調査を行い、彼らのニーズや優先事項について検討した結果、同事業は、心理的居場所として機能し、彼らのエンパワメントや肯定的なアイデンティティの発達を支えている可能性が示唆された。ND パラダイムにおける支援では、存在や表現方法の多様性が尊重され、その意義について公平に議論されること、そして、相互主観を醸成し、新しい価値をともに創り上げていくことが重要であると考えられた。

Key Words： 自閉スペクトラム症，発達凸凹，ニューロダイバーシティ，ピアサポート，エンパワメント

I. はじめに

かつて、「自閉症」は子どもの精神疾患とされ、研究者の関心はもっぱら他覚的に認識される症状と経過にあり、症状の軽減や社会参加といった定型発達の価値観に立脚した治療または支援が主流であった(本田・大島, 2022)¹⁰。自閉症は、社会的および環境的要因から離れて、個人に帰属する問題とみなされ、また、定型発達の優位を前提とし、定型発達の水準を達成することや、水準からの逸脱を克服すること、そして、そういった臨床的な理想像に適応することを求められてきた。

自閉スペクトラム症(autism spectrum disorder: ASD)のある人々のリソースは、社会的多数派の方法論を身につけることに大きく消費されてきたが、最近では、ASD 特性を、カモフラージュ(camouflage)、またはマスク(mask)し、より定型発達的に見えるようにしようとする試みは、彼らの疲労や燃え尽き症候群、不安、抑うつ、ストレス、幸福度の低下、自殺傾向に関連する可能性が指摘されている(e. g.

Cage & Troxell-Whitman, 2019²⁾; Cassidy et al., 2018³⁾; Cooper et al., 2017⁴⁾; Higgins et al., 2021⁹⁾; Hull et al., 2017¹¹⁾; Livingston et al., 2019¹⁴⁾; Pearson & Rose, 2021²²⁾; Raymaker et al., 2020²⁴⁾。

Hull et al. (2017)によれば、自閉スペクトラム状態(autism spectrum condition: ASC)のある成人は、社会場面で ASC に関連する行動を隠したり、社会的に有能であるように見せる明示的な方法を用いたり、また、他者に社会的な困難さを見られないように努めたりする、カモフラージュの戦略をもっており、その使用は短期的には、カモフラージュの目的をしばしば達成させたとしても、極度の疲労と不安をもたらし、長期的には、メンタルヘルスや自己認識、支援資源に繋がることへの深刻な影響を与える可能性がある。なお、この研究では、「障害」という用語によりスティグマ(stigma)を生じさせないよう、ASD ではなく、ASC という表現を使っている¹¹⁾。また、Raymaker et al. (2020)は、過剰な環境からの要求によって引き起こされる、ASD のある人々の燃え尽き症候群の経験について報告している。ASD のある成人は、社

会の期待に応えようと、日常生活で無理を重ねて疲れ果ててしまい、加えて、自分本来の思考と記憶、計画の作成と実行、日常生活の活動、人付き合い、セルフケアなど、幅広いスキルを喪失する経験をしており、それは、自殺行為を含む、心身の健康や自立生活能力、生活の質(quality of life : QOL)を低下させることを説明している。彼らは併せて、定型発達の人々から共感が得られないことについて話し合い、社会の受け入れが進み、期待が軽減されることや、ASD 的な方法で物事を行えることは、ASD の燃え尽き症候群からの回復に関連すると主張している²⁴⁾。

近年、社会のなかで多様性(diversity)を尊重する動きが広まってきている。多様性とは、社会の文脈では、集団や個人の間には存在しているさまざまな違いのことを意味する。包括や受容を意味するインクルージョンと併せて、ダイバーシティ&インクルージョン(diversity & inclusion)と表現され、多種多様な人材が単に集まっているだけではなく、互いの考え方の違いや個性を受け入れ活かしながら、ともに成長することを社会全体で目指している。

ASD についても、神経学的な差異を障害や機能不全ではなく、ヒトの多様な変異のあり方として認識し尊重する、ニューロダイバーシティ(neurodiversity : ND)のパラダイムのなかで、その概念を多角的に検討し、捉えなおそうとする研究動向が生じている(e. g. Begatell, 2010¹⁾; Crompton et al., 2020⁵⁾; 福田ら, 2021⁸⁾; Komeda et al., 2015¹²⁾; Milton, 2012¹⁶⁾; Morrison et al., 2019¹⁷⁾; Ochs & Solomon, 2010²⁰⁾; 大井ら, 2022²¹⁾; Spikins et al., 2016²⁷⁾; Takagi, 2019²⁹⁾。これらの取り組みは、ASD の性質に関する最も基本的な仮定を根本的に変え、共有されている理論的信念や価値観、技術を拡大および変更することを主張している(Pellicano & den Houting, 2022)²³⁾。

例えば、Milton(2012)は、共感やコミュニケーションには双方向性があり、ASD だけに帰属する、普遍的な「心の理論の欠如」神話ではなく、異なる世界の見え方や感じ方、経験をもつ社会的行為者間の相互作用に基づくとする、二重共感問題(double empathy problem)を提起した¹⁶⁾。これを受けて、Crompton et al. (2020)や Morrison et al. (2019)は、ASD のある人々と定型発達の人々の相互作用を検証し、ASD のある人々は他の ASD のある人々との交流を好む傾向があり、そこでは密接な社会的絆と共感

を経験することを報告し、ASD のある人々同士はお互いに情報をうまく共有し、良好な関係を体験するスキルをもっていること、そして、ASD と定型発達の人々では相互作用のスタイルに違いがあることを示唆している^{15), 17)}。

Komeda et al. (2015)は、相互性や類似性に注目し、心理学・神経学的手法を用いて、ASD のある人々の共感の存在を明らかにした。脳活動を計測した結果、ASD のある成人は ASD の特徴のある人物を判断する際に、共感や自己意識に関わる、腹内側前頭前野が有意に活動したことを報告している。人間は自分と似た症状や性格特性をもつ他者には共感し、自動的にその人物について理解をすることができるが、自分と症状が似ていない他者や性格特性が似ていない他者には共感することが難しく、先行する手がかりから分析的にその人物を理解すると考察し、類似性仮説を提唱している¹²⁾。

他分野からも ASD の再概念化についてポジティブな見解がある。Ochs & Solomon(2010)は、言語人類学の見地から、ASD の社会性は、人間の社会性に関する人類論的研究において、間違いなくユニークな位置を占めており、人間の社会文化的生態の理解に驚くべき明瞭さをもたらすと述べている。彼らは、ASD の社会性がさまざまな状況条件下でどのように変化するかを調べ、ASD のある人々の社会的関与を強化する、自閉的社会性(autistic sociality)を増減するアルゴリズムとして、「会話連鎖が短い」「話題は客観的知識が多い」「対面的ではない身体配置」「相互作用を媒介するアートや動物」「控えめな感情表現」「やや速めの会話テンポ」などのコミュニケーション様式を提示している。このコミュニケーション様式が認められる、あるいは共有される場合、ASD のある人々は社会性やコミュニケーションの障害状態を経験しない²⁰⁾。また、Spikins et al. (2016)は、考古学の見地から、ND の考え方をさらに進めて、人類進化における ASD のある人々の存在の重要性について論じている。共同道徳(collaborative morality)の社会は、向社会的性に対するさまざまな適応戦略の触媒となり、人材の多様性を広げる。ASD 的傾向のある人材もその一つのタイプとして必要とされ、なかでも、大勢に流されず、イノベーションを起こし、確固たる法則に基づいて社会を導くことで貢献してきた。複雑な心の理論がこそ、向社会的であり、選択的に有利であるという仮定から離れると、人間社会におけるさまざまな向社会的戦

略や、個性の多様性の複雑さを理解し始めることができる²⁷⁾。

NDパラダイムは、ASDのある人々の人生経験の本質を理解し、彼らにとって何が有意義な人生を構成するかについての議論を進める。最初期のニューロダイバージェント(neurodivergent)である、Sinclair(1993)が演説で述べているように、ASDは“一つの生き方(Autism is a way of being.)”としての側面を有している²⁶⁾。これまで、幸福とQOLは、職業や自立、人間関係などの結果を含む客観的な構成要素として提示されてきたが、Lam et al. (2021)は、ASD特有の価値観や目標、ニーズを考慮に入れると、より広い範囲の潜在的な要素に気づき、この見方は変わる可能性があることを指摘している。多様な生き方が肯定され、ASDらしく、自分らしく生きていくことを支える支援のあり方について考えていく必要がある¹³⁾。

これまでの介入や支援が、ASDのある人々のQOLを向上させたかどうかについて、McConachie et al. (2020)は、アルゼンチン、オーストラリア、シンガポール、イギリスにおいて、ASDのある成人を対象とした9つのコンサルテーショングループを開催し、WHOQOL-BREF(World Health Organization QoL questionnaire)とWHOQOL Disabilities add-on moduleの項目についての検討を行った。それぞれのグループディスカッションを書き起こし、テーマ別に分析し、ASDのある人々にとって特に関連性のあるもの、または、欠けていたトピックや経験を特定したところ、ASDのある人々のQOLに関連するテーマには、ポジティブなアイデンティティや、ASDに対する他者の理解不足、ASDのある人々の社会への貢献、感覚の問題などが見出された¹⁵⁾。

こういったASDのある人々のニーズや優先事項を研究や実践に反映していくためには、彼らの自己決定や自律性などセルフアドボカシーが重要である。Dwyer(2022)は、ASDのある人々は、どのアプローチが自分にとって最も役立つか、あるいはアプローチを必要とするかどうかについての重要な洞察をもっている可能性が高く、実態や状況によって例外は考えられるが、本人が伝えることができる範囲において、その選好性は尊重されるべきであるとしている⁶⁾。一部では、ASD研究者とASDコミュニティがパートナーシップを築き、ともに研究を進める試みも始まっており(e.g. Fletcher-Watson et al., 2019⁷⁾)、より広い視野でASD

研究と実践では何が重要であるかを捉えていくことが期待される。

● Ⅱ. 実践研究報告：世田谷区受託事業「みつけばハウス」の取り組み

2016年、NPO法人東京都自閉症協会は世田谷区より委託を受け、ASDを含む発達障害やその傾向(以下、発達凸凹特性)のある青年期(10～20代)の若者が、多彩なワークショップの経験を通じて、生きるヒントになる「ナニか」をみつける場所として、「みつけばルーム」事業を開始した。コンセプトを象徴するキャッチフレーズは、「ナニかがみつかる、冒険がはじまる」である。2018年には、発達障害児者やその家族が地域で安心して暮らしていけるよう、関係する分野との協働による切れ目のない支援等が可能となるような先駆的な取組を通じて有効な支援手法を開発・普及し、地域生活支援の向上を図る、厚生労働省の「発達障害児者地域生活支援モデル事業」に選定され、地域生活支援の観点でも取り組みが進められた。3年間の試行期間を終えて、現在は事業規模を拡大し、「みつけばハウス」として、発達凸凹特性のある若者に対する新しい支援のあり方について検証・検討を継続している。

本事業の大きな特徴は、同じような境遇にある仲間が対等な関係性のなかでサポートを行う、ピアサポートの手法を用いて企画運営されていることである。発達凸凹特性のある成人当事者がピアサポーターを務め、利用する若者が自己表現から「自分」を知っていったり、自分らしく生きる方法を探っていったりするための「ナニか」を主体的にみつける機会を提供し、そのプロセスを支えている。

本稿では、みつけばルームおよびハウス(以下、みつけば)の取り組み経過を利用者の視点から振り返り、そのなかで見出された、発達凸凹特性のある若者のニーズや優先事項について検討を行う。また、NDパラダイムにおける新しい支援のあり方について考察する。

● Ⅲ. 方法

1. ワークショッププログラム

みつけばで展開される、ワークショッププログラムの概要をTable 1に示す。ワークショップ

ブは、提供者と対象者によって大きく4つに分かれ、「利用者によるワークショップ」を除き、年間を通して、全体で月20回程度実施される。例年、予約および参加の人数を集計すると、タイトルからは内容を想像することが難しいニッチなプログラムほど人気を集め、新奇性が好まれる傾向がある。カテゴリーとしては、図画工作系やアナログゲーム系のプログラムが好評である。

ワークショップの選択や参加は、利用者各自のニーズや状態・状況に任されている。毎月、ワークショップの内容をまとめた冊子を配布しており、利用者はこれを読み、またはスタッフから説明を聞き、自分の興味関心やスケジュール、体調等の事情を考慮して予約を行う。

自分のタイミングやペースで参加できる、ワークショップを通じて、利用者は多種多様な表現方法を体験する。自分の好きな物事を表現し、マニアックな話題をシェアするなかで、分か

合える心地よさや喜びを体感する。そして、そういった共感的な交流から価値観が変わったり、世界が広がったりして、自分は何者であるのか、自分はどのようにありたいのか、自分は何を大切に生きていきたいのかといった「自分のありたい姿」を見出していけることをねらいとしている。

2. 利用者アンケート

みつけばのコンセプトや支援アプローチの有効性について探索的に検証するために、利用者を対象にアンケート調査を実施した(世田谷区・NPO法人東京都自閉症協会, 2018)²⁵⁾。調査協力者は、男性17名、女性10名の計27名であった。平均年齢は、20.59歳(13~29歳, SD=4.40)であった。利用者には、調査の趣旨および倫理的配慮について、書面や口頭で説明をした上で、自由意志に基づいて調査への協力を求めた。

本稿では、試行期間に得られた、自由記述「あ

Table 1 ワークショッププログラムの概要

	外部講師による ワークショップ	ピアサポーターによる ワークショップ	利用者による ワークショップ	サロン
形式	利用者と外部講師によるクローズドなワークショップ ピアサポーターが運営をサポートする	利用者とピアサポーターによるクローズドなワークショップ	利用者とピアサポーターによるクローズドなワークショップ 発表の機会に外部からの招待客あり	利用者と区民向けのオープンな時間
期間 頻度	通年・月4~6回	通年・月15回	不定期・年1~2回	通年・月5回
対象者	利用者	利用者	利用者・スタッフ	区民・利用者
内容	放送作家や美術家、ダンサー、デザイナー、ピオトープ管理士など、さまざまな分野からその道を究めた多彩なスペシャリストを講師に迎えている 毎月、講師や内容は異なる	歴史や宇宙、自動車、鉄道、植物、料理、工作、ゲーム、アンダーグラウンドなど、「こだわり」(好きなこと・モノ)をとことん追求することから生まれるマニアックな企画になっている ピアサポーターによってテーマは異なり、毎月内容も異なる	利用者が各々、企画やアイデアを持ち寄り、プレゼンテーションと投票形式による選考を行い、準備を経て実施される ピアサポーターはその運営をサポートする 企画例： 「みんなでつくる創作神話：フィクションショー」	ゲームをしたり、お絵描きをしたり、おしゃべりをしたり、自由に過ごすことができる 区民だけではなく、区外の方も参加することができる 事前予約制になっている

なたにとって、みつけばはどんなところ?」「みつけばを利用してよかったこと」「みつけばを利用してみつかったこと」「みつけば利用後の日常生活における変化」4項目の回答内容を質的に分析し、掲載する。分析方法は、各項目の回答について、意味内容の類似性にしたがって分類整理し、構成概念を抽出した。また、自由記述全体でテキストマイニングを行い、単語(名詞、動詞、形容詞)の出現頻度を解析し、ワードクラウドの手法を用いて図示した。

● Ⅳ. 経過報告：

利用者は「ナニ」をみつけたのか

青年期は、とりわけ、「自分とは何か」「自分らしさとは何か」「社会のなかでどのように生きていくのか」というアイデンティティの問題と直面する心理社会的発達段階である。自分の生き方や考え方など、自分自身について深く考える時期であり、また、自分とつながっている他者や環境についても考えることから、自己形成という仕事を支える意味でも、「居場所」の存在と役割は重要とされている(小畑・伊藤, 2001)¹⁹⁾。発達凸凹特性のある若者にとって、みつけばはどのような居場所であり、そこでどのような「自分」を見出しているのだろうか。

みつけばの利用者にアンケート調査を行い、「あなたにとって、みつけばはどんなところ?」

と尋ねたところ、Table 2 の結果が得られた。利用者にとって、みつけばは、地域の物理的居場所に留まらず、心の拠り所となる関係性や安心感があり、ありのままの自分が受容される「心理的居場所」(則定, 2008)¹⁸⁾としても機能している可能性が示唆された。

田島ら(2015)によれば、自分の存在を実感し、精神的に安心していられ、自己表現ができ、役に立っていると自分の存在に価値を見出すことなどで「心理的居場所感」が満ちている人は、日常生活の場での充実感や適応が高まり、また、さまざまな物事へとチャレンジする気持ちが湧き、意欲的に行動できる傾向にある²⁰⁾。

「みつけばを利用してよかったこと」(Table 3)と「みつけばを利用してみつかったこと」(Table 4)では、ワークショップに参加し、他者と共感的に交流するなかで、経験や知識が増え、興味の幅が広がったこと、そして、自分の興味あることや好きなことを表現し、自分の新しい一面や気持ちを発見できたことについての記述がみられた。特に、「みつかったこと」を参照すると、これまでのネガティブな自己イメージや対人交流のイメージを変容し、自分と社会との関係を再構築していこうとする心の動きを読み取ることができる。さらに、「みつけば利用後の日常生活における変化」(Table 5)では、学校や職場、家庭など日常生活の場においても、利用者の内面や行動にポジティブな変化がうかがえ、いままでできなかったことや、新しいこと

Table 2 みつけばってどんなところ?

経験の保障	<ul style="list-style-type: none"> ・人と生きる経験を積めるところ。 ・勉強など自分のやりたいことができるところ。 ・自分の興味を広げられる場所だと思います。 ・部活動的な存在な気がしています。 ・友だちができる場所。
安心できて、楽しい	<ul style="list-style-type: none"> ・安心できるところ。落ち着くところ。 ・楽しかったり、心が休まる場所です。 ・リフレッシュするところ。 ・失敗するのが怖くない場所。 ・家族以外と気軽にコミュニケーションがとれる場所です。 ・楽しいところ。
心の拠り所	<ul style="list-style-type: none"> ・なんか気づいたら来たくなる場所。常備薬。 ・超合法薬物。なくてはならない存在。いろんなところで抱えられたストレスを作品にぶつけることができる。どんな話をしても大丈夫。 ・理解できる場所。

Table 3 みつけばを利用してよかったこと

興味あることや好きなことを表現できた	<ul style="list-style-type: none"> ・趣味の共有ができる。 ・カラオケやダンスやアニメの話ができた。 ・マイナーなジャンルを知っている人がいたから。 ・勉強など自分のやりたいことができる。 ・誰の目も気にしないで作品が作れること。誰の耳も気にしないでいろんなことが言えること。
他者と交流できた	<ul style="list-style-type: none"> ・みつけばのスタッフや利用者と一番に遊んだり、いろいろな話ができただこと。 ・普段会えないような個性があふれている人と交流できてよかった。世の中には量産化している人が多いけど、ここでは特注の人と活動できる。 ・人と触れ合えること。いろいろな人と交流できること。 ・友達が増えた。 ・利用者とのチームワーク。
新しい経験ができた	<ul style="list-style-type: none"> ・普段できない体験がいろいろできたこと。 ・いろいろな物を作れたり、知れたりできてよかった。 ・新しいことを知った。
日常生活の変化	<ul style="list-style-type: none"> ・社交性が上がった。興味の幅が広がった。 ・リクエイオン（プログラム名）で勉強したおかげで、旅行に行けました。これからも勉強したいです。
その他	<ul style="list-style-type: none"> ・ほとんどすべて楽しいです。 ・支援をしてくれる。

Table 4 みつけばを利用してみつかったこと

知識	<ul style="list-style-type: none"> ・いろいろな知識。 ・知らなかった世界を知ることができた。知らなかった世界のなかで自分が知っていることを見かけると「おっ」となる。 ・囲碁の楽しさ。 ・いいアドバイスをもらうこと。
自分	<ul style="list-style-type: none"> ・みつけばに来て、一般の社会で健常の人が経験している「普通の過ごしやすさ」は、こんな感じなのかなと思いました。今までよくわからなかったけど、一般の社会めっちゃ過ごしにくかったな！と思いました。自分にとってはハードモードで生きていたことに気づけたのかなと思います。 ・ふだん他人と話すのが苦手ということ。 ・自我。
他者	<ul style="list-style-type: none"> ・同じような人がいる。 ・同じ趣味の人や友だちが見つかりました。
安心	<ul style="list-style-type: none"> ・安心できるところが見つかった。 ・いじめのない場所だと思った。
やりたいこと	<ul style="list-style-type: none"> ・勉強など自分のやりたいこと。

へのチャレンジがみられ始めている。

自由記述全体の単語頻度をみると (Fig.1, Table 6), 動詞「できる」の出現頻度が 20 回と最も高かった。利用者にとって「できる」という思いや経験は、安心感や自尊心を高め、自己表現や意欲を肯定し、「自分のありたい姿」を支持していると推察される。

● V. 考察：みつけばの取り組みを通して「ナニ」がみつかったのか

みつけばでは、ワークショップを通じて、気になることや好きなこと、不安、怒り、悲しみ、喜び、ことばにならない感情など、自分を自由に表現することを何よりも大切にしている (世田谷区・NPO 法人東京都自閉症協会, 2018)²⁶⁾。ピアサポートによる、共感的で支持的な雰囲気なかで、「みつけばでは、自由に表現しても大丈夫」という信頼関係ができると、利用者それぞれのユニークな個性が発揮され、実に多様な豊かな表現が生まれる。それは、自分本来の在り方や表現方法が肯定される、かけがえのない経験であり、彼らの安心感や自尊心に寄与し、自分は何者であるのか、自分はどうかあるのか、自分は何を大切に生きていきたいのかといった、「自分のありたい姿」に出会う旅路を助ける。自己理解は、自己表現からつくられるのである。そして、その表現が受けとめられたり、表現を通じて他者と交流できたりする経験は、

彼らの他者や社会との関係性をポジティブに変容させ、主体的なコミュニケーションや社会にコミットする意欲が育まれていく。Hull et al. (2017)によれば、ASCのある成人は、他者と調和し、つながりをつくりたいという動機から、カモフラージュを行う¹⁾。カモフラージュを必要とせず、あるいは、選択的にカモフラージュすることができ、「いまありたい自分」を表現することが許される場合は、彼らに無理のない共有体験を保障し、自己形成や交流を促進すると考えられる。実際、最初は黙々と自分の作品をつくられていた利用者に、他者との共同作業を自発的に楽しむようになったり、みんなで助け合って作品をつくるようになったりする、明らかな変化がみられるようになった。みつけばの利用者が教えてくれた、このエンパワメントおよびアイデンティティの発達プロセスを Fig.2 に示す。

ND パラダイムにおける新しい支援のあり方について考えるとき、現状では、エンパワメントは不可欠な要素であるといえよう。エンパワメントは、本来ある力を取り戻す実践であり、一人の人間として社会から歓迎され、肯定的なアイデンティティの発達が認められる。自尊心から、自己決定や自律性が高まり、自分の人生を生きることができる。そこでは、ASD 的な方法で物事を行えることなど、表現方法の多様性や選択性が尊重され、その意義について公平に議論されるであろう。また、エンパワメントは、彼らの主観的な尺度での、健康や幸福、QOL に関わり合う。何をもちて幸せとするかは、その

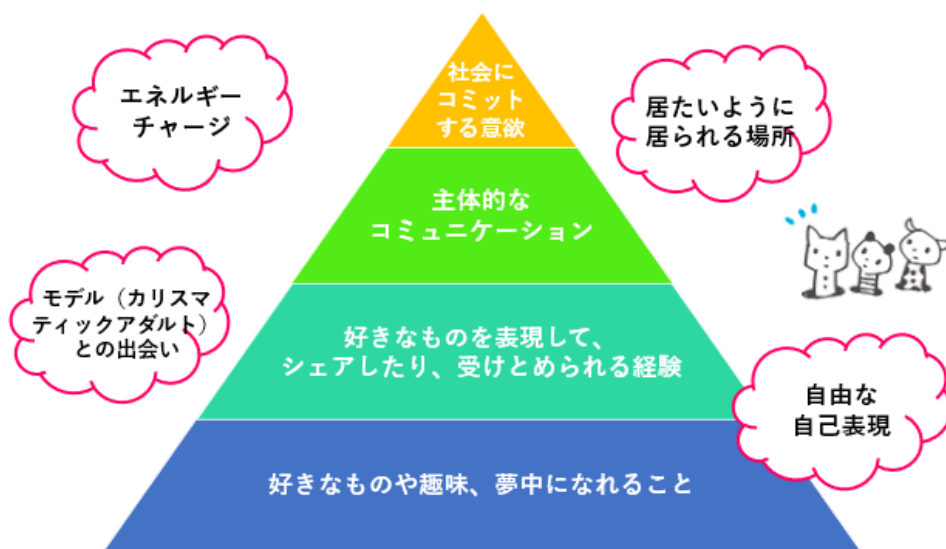


Fig.2 エンパワメントおよびアイデンティティの発達プロセス

(世田谷区・NPO 法人東京都自閉症協会 (2018)²⁶⁾ より引用し一部改変)

人の自由であり、いろいろな幸せのかたちがあってよい。社会は多様なウェルビーイングに支えられ、持続し、進化してきたのである(cf. Spikins et al., 2016)²⁷⁾。

したがって、NDパラダイムにおける支援とは、多種多様な人々と対話し、さまざまな表現方法を取り入れ、新しい価値をともに創り上げていく開発的で創造的な営みであるといえる。本人の自己表現を共有し、本人がどうありたいかを相互主観的に考える。これは支援者自身も、自分がどうありたいかという問いを同時に得ることになるであろう。支援者および研究者と当事者コミュニティが協力し合い、伝統と革新に挑戦する、研究と実践のムーブメントが今後、我が国においても広がっていくことが期待される。

● VI. 今後の課題

これまで、みつけばでは、青年期にあたる10代～20代の若者を対象に支援を提供してきたが、現在、小中学生を対象としたプログラムや、青年期以降、30代～50代の方を対象としたミドルプロジェクトを定期的実施し、発達凸凹特性のある人々の、さまざまな世代や生活状況でのニーズや優先事項についても検証・検討を進めている。また、「自分のありたい姿」を見つけた利用者に、みつけばハウスはどのようなプログラムを提供することができるのか、あるいは、一緒に「ナニ」をつくっていくことができるのかを引き続き、探求していきたい。そのチャレンジは、人間と社会の多様性の質を豊かにし、発展に貢献すると信じている。

文 献

- 1) Bagatell, N. (2010) : From Cure to Community : Transforming Notions of Autism. *Ethos*, 38(1), 33-55.
- 2) Cage, E., & Troxell-Whitman, Z. (2019) : Understanding the Reasons, Contexts and Costs of Camouflaging for Autistic Adults. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 49(5), 1899-1911.
- 3) Cassidy, S., Bradley, L., Shaw, R., & Baron-Cohen, S. (2018) : Risk markers for suicidality in autistic adults. *Molecular Autism*, 9(1), 42.
- 4) Cooper, K., Smith, L. G. E., & Russell, A. (2017) : Social identity, self-esteem, and mental health in autism. *European Journal of Social Psychology*, 47(7), 844-854.
- 5) Crompton, C. J., Ropar, D., Evans-Williams, C. V., Flynn, E. G., & Fletcher-Watson, S. (2020) : Autistic peer-to-peer information transfer is highly effective. *Autism*, 24(1), 1704-1712.
- 6) Dwyer, P., Mineo, E., Mifsud, K., Lindholm, C., Gurba, A., & Waisman, T. C. (2022) : Building Neurodiversity-Inclusive Postsecondary Campuses : Recommendations for Leaders in Higher Education. *Autism in Adulthood*. <http://doi.org/10.1089/aut.2022.11.01> (取得日)
- 7) Fletcher-Watson, S., Adams, J., Brook, K., Charman, T., Crane, L., Cusack, J., Leekam, S., Milton, D., Parr, J. R., & Pellicano, E. (2019) : Making the future together : Shaping autism research through meaningful participation. *Autism*, 23(4), 943-953.
- 8) 福田純子・平谷美智夫・三浦優生・大井学 (2021) : 自閉症者のコミュニケーション誤用に対する自閉症者の認容性 コミュニケーション障害学, 38(1), 26-32.
- 9) Higgins, J. M., Arnold, S. R. C., Weise, J., Pellicano, E., & Trollor, J. N. (2021) : Defining autistic burnout through experts by lived experience : Grounded Delphi method investigating #AutisticBurnout. *Autism*, 25(8), 2356-2369.
- 10) 本田秀夫(監修)・大島郁葉(編)(2022) : おとなの自閉スペクトラム メンタルヘルスケアガイド, 金剛出版.
- 11) Hull, L., Petrides, K. V., Allison, C., Smith, P., Baron-Cohen, S., Lai, M., & Mandy, W. (2017) : "Putting on my best normal" : social camouflaging in adults with Autism Spectrum Conditions. *Journal of Autism and Developmental Disorders*, 47(8), 2519-2534.
- 12) Komeda, H., Kosaka, H., Saito, D. N., Mano, Y., Fujii, T., Yanaka, H., Munesue, T., Ishitobi, M., Sato, M., & Okazawa, H. (2015) : Autistic empathy toward autistic others. *Social Cognitive and Affective Neuroscience*, 10(2), 145-152.

- 13) Lam, G. Y. H., Sabnis, S., Migueliz Valcarlos, M., & Wolgemuth, J. R. (2021): A critical review of academic literature constructing well-being in autistic adults. *Autism in Adulthood*, 3(1), 61-71.
- 14) Livingston, L. A., Shah, P., & Happé, F. (2019): Compensatory strategies below the behavioural surface in autism: a qualitative study. *The Lancet Psychiatry*, 6(9), 766-777.
- 15) McConachie, H., Wilson, C., Mason, D., Garland, D., Parr, J. R., Rattazzi, A., Rodgers, J., Skevington, S., Uljarevic, M., & Magiati, I. (2020): What is important in measuring quality of life? Reflections by autistic adults in four countries. *Autism in Adulthood*, 2(1), 4-12.
- 16) Milton, D. (2012): On the ontological status of autism: The 'double empathy problem'. *Disability & Society*, 27(6), 883-887.
- 17) Morrison, K. E., DeBrabander, K. M., Faso, D. J., & Sasson, N. J. (2019): Variability in first impressions of autistic adults made by neurotypical raters is driven more by characteristics of the rater than by characteristics of autistic adults. *Autism*, 23(7), 1817-1829.
- 18) 則定百合子(2008): 青年期における心理的居場所感の発達の變化 カウンセリング研究 41, 64-72.
- 19) 小畑豊美・伊藤義美(2001): 青年期の心の居場所の研究—自由記述に表れた心の居場所の分類 情報文化研究, 14, 59-73.
- 20) Ochs, E., & Solomon, O. (2010): Autistic sociality. *Journal of the Society for Psychological Anthropology*, 38(1), 69-92.
- 21) 大井学・水谷柳子・福田純子・平谷美智夫(2022): 成人における Broader Autism Phenotype の程度または自閉症スペクトラム障害の診断と語用障害に対する認容性との関連 コミュニケーション障害学, 39(1), 1-9.
- 22) Pearson, A., & Rose, K. (2021): A conceptual analysis of autistic masking: Understanding the narrative of stigma and the illusion of choice. *Autism in Adulthood*, 3(1), 52-60.
- 23) Pellicano, E., & den Houting, J. (2022): Annual research review: Shifting from 'normal science' to neurodiversity in autism science. *Journal of Child Psychology and Psychiatry*, 63(4), 381-396.
- 24) Raymaker, D. M., Teo, A. R., Steckler, N. A., Lentz, B., Scharer, M., Delos Santos, A., Kapp, S. K., Hunter, M., Joyce, A., & Nicolaidis, C. (2020): "Having all of your internal resources exhausted beyond measure and being left with no clean-up crew": defining autistic burnout. *Autism Adulthood*, 2(2), 132-143.
- 25) 世田谷区・NPO 法人東京都自閉症協会(2018): 世田谷区受託事業「みつけばルーム」事業報告書(平成 28 年 6 月～平成 30 年 5 月).
- 26) Sinclair, J. (1993): Don't Mourn For Us. Accessed from: http://www.autreat.com/dont_mourn.html on (2017 年 6 月 29 日取得).
- 27) Spikins, P., Wright, B., & Hodgson, D. (2016): Are there alternative adaptive strategies to human pro-sociality? The role of collaborative morality in the emergence of personality variation and autistic traits. *Time and Mind*, 9(4), 289-313.
- 28) 田島祐奈・山崎洋史・渡邊美咲(2015): 青年期における心理的居場所感に関する研究: 学校生活充実感と日常的意欲との関連を通して, 学苑, 900, 58-66.
- 29) Takagi, T. (2019): Referring to past actions in caregiver-child interaction in Japanese. *Research on Children and Social Interaction*, 3(1-2), 92-118